広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

# 身に付ける土佐和紙 世界に魅力を発信するリング

**「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。**

## レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家〈東京大学教授〉）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト〈アート・プロデューサー〉）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか？」「地域のオリジナリティーはあるか？」「コンセプトやターゲットは明確か？」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約1年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の一つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。高知県選出の匠、土佐和紙職人の濵田洋直さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

エリア・コンサルティング

1月18日、プレゼンテーションにて

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

## 紙の町で作る紙のアクセサリー

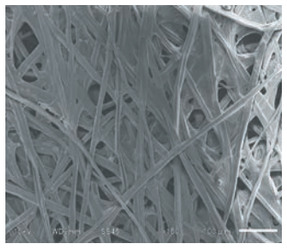
世界一薄い伝統の土佐典具帖紙（てんぐじょうし）を漉く匠であり、和紙の可能性を追求するアーティストでもある濵田さん。過去にも典具帖紙の透明感を生かした和紙の花や光のオブジェなどを製作してきたが、今回のプロジェクトでは「身に付ける」プロダクトにこだわった。人が身に付けて動けば、和紙も一緒に旅をする。行く先で出会った人がその素材や形に興味を持ち、持ち主がその魅力を伝えたくなるモノを作りたいと考えた。

伝統を受け継ぐ手漉き技術

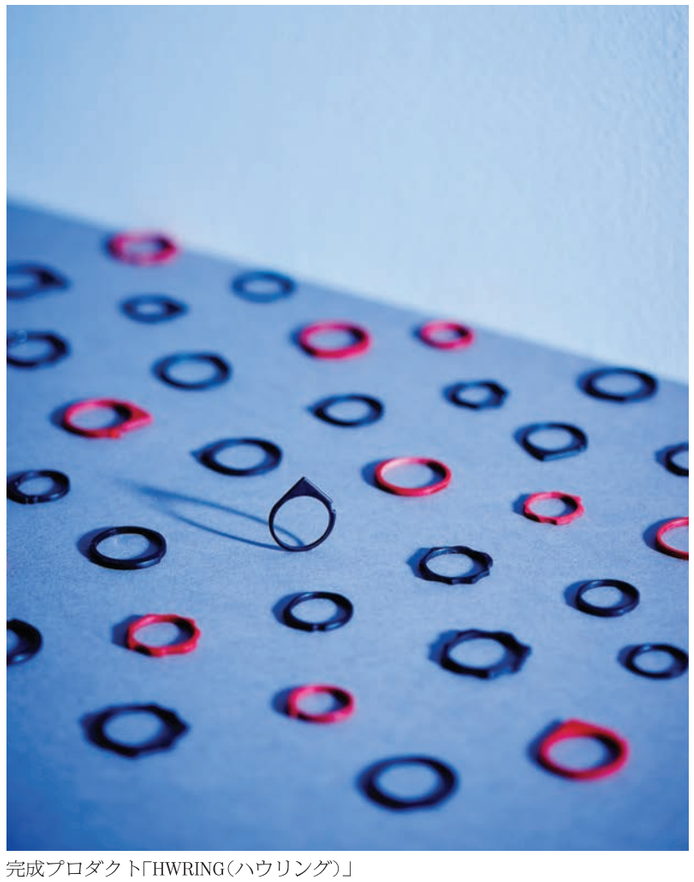
カバンやブルゾンなども試作したが、生産地であるいの町にその加工業者はない。地場産業として栄えてきた土佐和紙を、地域の人の手で加工し、発信すること。1次産業である紙漉きを起点にさらに地域で循環させたいとの思いから、リングの製作を決めた。何よりも濵田さん自身が「欲しい！」と感じたことが原動力となり、他にはない指輪のイメージが膨らんでいった。

リングは漉いた和紙を何層にも重ねて圧着し、樹脂で固めた紙の板から切り出したもの。繊維と繊維が絡まり合う和紙だからこそ、すき間に樹脂が入り込んで固まる。新たな製法に行き着くまでには、高知県紙産業技術センターの協力があった。

仁淀川の自然環境が地域の力を生む


顕微鏡で見た和紙

当初は漆で固めることを考えていたが、扱いが難しい上に乾燥に時間がかかり、コスト高につながる。手にとりやすい価格を実現するために樹脂を採用した。多くの種類がある中から、和紙と相性のよい樹脂を選び、耐水性と強度に優れた製品に導いてくれたのが高知県紙産業技術センターの熱意あるスタッフだった。日本全国に四つしかない紙産業センターの一つが、わが町いの町にあること。これも地域の力なのだと、濵田さんはいう。


完成プロダクト「HWRING（ハウリング）」

濵田 洋直
高知県／土佐和紙職人

## 国境を超えて愛される製品を

1月18日のプレゼンテーションで、土佐和紙を育んできた仁淀川の風景を織り交ぜながら、リング製作の思いを語った濵田さん。整然とリングを並べたシンプルな装いのブースはひときわ目を引き、無言のうちに和紙の魅力と可能性を物語った。

ニコラ氏と濵田さん

プレゼンテーション終盤、今回のプロジェクトを支えてきたサポートメンバーが、52人の匠の中からそれぞれ「注目の匠」を選んだ。濵田さんはインテリアや建築、プロダクトまで幅広く手掛けるフランスのデザイナー、ニコラ氏に選ばれ、高い評価を受けた。

「一見何か分からない。日本人が作ったのかも分からないが、好奇心をそそられる。世界に通用するのはこういった作品だ」と絶賛。「最初から世界に向けて発信したいと思っていたので、ニコラ氏に認められたことはとてもうれしいし自信になった」と、濵田さん。その顔は晴れやかだ。

ニコラ氏から商品名について「『HWRING（ハウリング）』はどう？」という提案ももらった。「共振」を意味し、浜田和紙の頭文字でもある。「HOW」の読み方が入ることで問いかけの意味も含む。「いい名前をいただきました！」と、笑みがこぼれた。

プロジェクトのキックオフからプロダクトの完成、発表まで約1年。濵田さんは、「長かった」と言いながらも、気持ちがブレずに製作に集中できたことがよかったと振り返る。サポートメンバーが「紙が洗練されたアクセサリーになる驚き、そして地域の人の手を介する物語性、いいプロダクトになると思います」と背中を押してくれたことが力になった。少しずつ自信を積み上げながら、常に全力で挑んだことが結果に結びついた。いつも通り、自分のペースで、自分のスタイルで。今回のプロジェクトで得たものは、「これでいいんだ」という自信と安心。それを糧にして、濵田さんは「次のやりたいこと」へと向かう。「実はもう、次のおもしろい計画があるんです」と、その目はやはり世界に向けられている。

リングは製品として完成し、パッケージも濵田さんがデザインした。高知市北本町のレクサス高知では、今回濵田さんが製作した『HWRING』の展示販売会を開催している（4月末まで。販売は限定50個）。

濵田 洋直
高知県／土佐和紙職人

1977年高知県いの町神谷で浜田和紙の長男として生まれる。1997年人間国宝である祖父・濵田幸雄に師事。2011年浜田和紙、四代目を継承。2013年弟の治と株式会社浜田兄弟和紙製作所「hamadawashi」を設立。多彩な和紙の使い方により、国内外さまざまなアーティストとコラボレーションする。「土佐典具帖紙」は、2001年に国の重要無形文化財に指定されている。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT